

からすがわ
鳥川



からすがわ
【鳥川データ】

なが
長さ…61.8 キロメートル

りゅういきめんせき へいほう
流域面積…470平方キロメートル

げんりゅう かわ かるいざわまち くらぶちまち さかい はなまがりやま
源流(川のはじまり)…軽井沢町と倉沢町の境にある鼻曲山

ごうりゅう かわ せいもう さんだいかせん うすいがわ かぶらがわ かながわ
合流する川…西毛の三大河川(碓氷川、鐺川、神流川)など

ごうりゅう とねがわ なが
と合流しながら、利根川に流れこみます。

かわ な ま え ゆ ら い い か と お せ つ
川の名前の由来…以下の通り、いくつかの説があります。

ひがし ほう せ い と き
ヤマトタケルが東の方に攻め入る時

ひ で からす
にひどい日照りにあい、烏がこの

すいげん あんない
水源に案内してくれたと

いわれているんだ。



からす みず
空州(水のない

おお
ところ)が多い

からだよ。

かみ
カラスを神さまのつかいだ

しん く ま の しんこう
と信じている熊野信仰と

かんけい
関係があるからですよ。



すいげん
水源がカラスのくちばし

かたち いわ かべ
のような形の岩の壁

うぐち
で、「烏口」といわれて

いるからだ。



すいげん ち け い からうす に
水源の地形が唐臼に似ていて、カラウスがカラス

か
にいつのまにか変わったのさ。



このほかに、^う ^{からす} 鵜や鳥がたくさんすんでいたからだという
^{せつ} 説などもあります。^{しりょう} 資料によって^か 書かれている^{ないよう} 内容が^{ちが} 違う
こともありますが、いろいろな^い ^{つた} 言い伝えや^{かんが} ^{かた} 考え方がありお
もしろいですね。

^{からす} ^が ^わ ^は ^こ 鳥川が運んだもの

^{むかし} ^{ひと} 昔の人たちにとって、^{かわ} ^{いま} ^{どうろ} 川は、今の道路のようなとても大切
^{ばしょ} ^{くるま} な場所でした。車もトラックもない時代、^{じだい} ^{おも} ^{にもつ} ^{とお} 重い荷物を遠くま
^{はこ} ^{たいへん} で運ぶのはとても大変です。しかし、^{かわ} ^{みず} ^{なが} ^{つか} 川の水の流れを使えば、
^{にもつ} ^{ひと} ^{ある} ^{はこ} ^{らく} たくさんの荷物を人が歩いて運ぶよりもずっと楽に、そして
^{はや} ^{はこ} 早く運べたのです。

^{たかさし} ^{していじゅうようぶんかざい} ^{かわうらやまごようぼくおきりだしえず} 高崎市の指定重要文化財に「川浦山御用木御伐出絵図」と
^{なが} ^{おお} ^{えまきもの} いう、長さ 10 メートルもある大きな絵巻物があります。こ
^え ^{えどじょう} ^き ^{くらぶちまち} ^{かわうらやま} の絵には、江戸城をなおすための木を、倉湊町にある川浦山

おはやし はこ
の御林(※) から運んだようすがくわしくえがかれています。

※おはやしとは※

ばく ふちよかつりん え ど じ だ い しやうぐん か ん り
幕府直轄林のこと。江戸時代に将軍がじかに管理
だ い じ も り し ろ き ふ ね
していた大事な森だぞ。お城をつくる木や、船をつ
き たいせつ き ば し ょ
くる木など、大切な木がある場所だったのだ。



そのころは、^{いま} 今の^{き かい}ような機械がありませんでした。^{かわうらやま}川浦山
では、^{ひと}人びとが^{おお}大きな^{き き}ケヤキの木を切り、



川浦山御用木御伐出絵図：立木伐採

さまざま^{どうぐ}な道具^{つか}を使い、



くふう^{きゅう}して急^{やま}な山^{した}の下^きまで木^{はこ}を運びました。



やま お き かわ はこ
山を下りた木は川まで運ばれ、



みず なが じょう ず つか かわ なが
水の流を上手に使って、川に流します。



そして、この時は現在の町屋町あたりで木を小さないかだ
に組み、さらに下流の新町あたりで大きないかに組み直し
ました。そのいかだは、利根川を通して、遠く江戸まで運ば
れていったのです。

烏川とその付近で起きた水害

今回は明治43年の水害を取り上げるぞ。このほ

かにも烏川では何度か水害が起こっているんだ。

明治43(1910)年8月、日本各地

を大雨が襲い、群馬県下全域に

百年来見たことがないといわれるほ

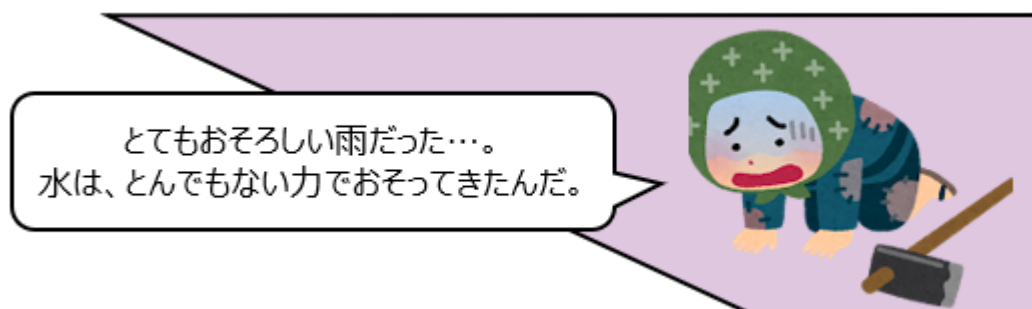
どの大水害をもたらしました。「明治の

三大洪水」と呼ばれる大きな災害のひとつです。群馬県内で

は306人が亡くなったり行方がわからなくなりました。



きゅうた か さ き し つ き な が あ め く わ た い ふう
 旧高崎市では、月はじめからの長雨に加え、2つの台風が
 あ い つ つ う か だ い す い が い み ま し な い
 相次いで通過したことによる大水害に見舞われました。市内
 ひ が い ゆ か う え し ん す い こ か お く り ゆ う し つ こ ぜ ん か い こ
 の被害は床上浸水が904戸、家屋の流失23戸、全壊3戸でした。
 さ い わ な ひ と ゆ く え ふ め い ひ と
 幸い、亡くなった人や行方不明の人はいませんでした。



8月10日

か ら す が わ み ず い じ ょ う ぞ う す い き み よ ば し ひ じ り い し ば し
 烏川の水は7メートル以上増水し、君が代橋・聖石橋・
 や な せ ば し い わ は な て つ き ょ う は し な が こ わ
 柳瀬橋・岩鼻鉄橋などの橋が流れたり壊れたりしました。
 し ん や つ よ な が て い ぼ う こ わ な み え ま ち う た が わ ち ょ う み ず は い
 深夜には強い流れが堤防を壊し、並榎町や歌川町に水が入っ
 てきました。

8月11日午後5時

は る な し ら か わ は ん ら ん か み な み え ま ち お そ な が の ぜ き ご う り ゅ う
 榛名白川が氾濫し上並榎町を襲い、長野堰と合流したため、
 お お は し ま ち な り た ち ょ う す え ひ ろ ち ょ う も と ま ち つ ば き ち ょ う や ま だ ち ょ う た か さ ご ち ょ う
 大橋町から成田町・末広町・本町・椿町・山田町・高砂町・

く ぞ う ま ち た ま ち ゆ み ち ょ う あ さ ひ ち ょ う ば し ょ み づ つ か
九蔵町・田町・弓町・旭町などの場所が水に浸かってしま
いました。

からすがわ かぶらがわ ていほう こわ のつけ いしはら やまな あくつ
 烏川や鵜川の堤防が壊れたため、乗附・石原・山名・阿久津
 ひく ばしよ みず しず きろく
 などの低い場所はすっかり水に沈んでしまったと記録され
 しがいち かのんやま おお みずうみ
 ています。市街地から観音山のあたりには大きな湖ができ、
 すこ き みず うえ み とく
 ほんの少しの木だけが水の上に見えているだけ……。特に、
 かわ ごうりゅうち てん た ごくんやわたむら いま みなみやわたちく
 2つの川の合流地点である多胡郡八幡村（今の南八幡地区）
 ひがい すいがいご ふつきゅう
 での被害がすさまじく、水害後もなかなか復旧ができず、
 たはた ざいさん うしな ひと なか こ にん せいかつ た なお
 田畑や財産を失った人たちの中で 14戸51人が生活を立て直
 ちようせんはんとう うつ す
 すために朝鮮半島に移り住みました。



＜吉井町誌に残る記録＞

よし いまち からすがわ しりゅう かぶらかわ なが
吉井町には烏川の支流となる鎚川が流れています。

たいふう ぞうすい かぶらがわ ちか た はたけ
この台風では増水した鎚川の近くで田んぼや畑がたくさ
なが みち みず
ん流され、あちこちで道がこわれたり水につかったりして、
とお ばしよ ようす
通れなくなる場所がたくさんありました。その様子はまるで
じごく きろく のこ
地獄のようだったと、記録が残っています。

かぶらがわ しりゅう おおさわがわ はんらん かわ せいし
鎚川の支流である大沢川も氾濫。川のそばにあった製糸
こうじょう なが こうじょう きんこ かりゅう なが
工場は流され、工場の金庫も下流まで流されてしまいました。
きんこ み くろう
その金庫を見つけるのにとっても苦勞したそうです。

＜新町町誌に残る記録＞

しんまち ひがい じんだい からすがわ からすがわばし やなせばし
新町での被害は甚大で、烏川にかかる烏川橋・柳瀬橋・
てつきょう なが こうつう とぜつ とく ひがい
鉄橋なども流されてしまい、交通が途絶しました。特に被害
おお ちいき こ いえ こ のこ なが
の大きかった地域では 50戸あった家が 1戸も残らず流され、
じんこう にん にん みず なが ゆくえ
人口200人のうち 160人あまりが水に流されて行方がわから
なくなったり、いのち お
命を落としたりしたそうです。

どこから見た鳥川でしょうか？



たかさきし
高崎市ではいろい

ろなところから、鳥

川を見ることができ

ます。そこで、図書館

で働いている人た

ちから「あなたの身近に

ある鳥川」をテーマに、写真を募集してみました。

すると、いろいろな場所で撮られた写真が、こんなにたくさん集まりました。

「同じ川でも、見る場所がかわるとこんなにちがうんだ！」と、きっと驚くと思います。



さて、これらの写真はどこから見た鳥川でしょうか？

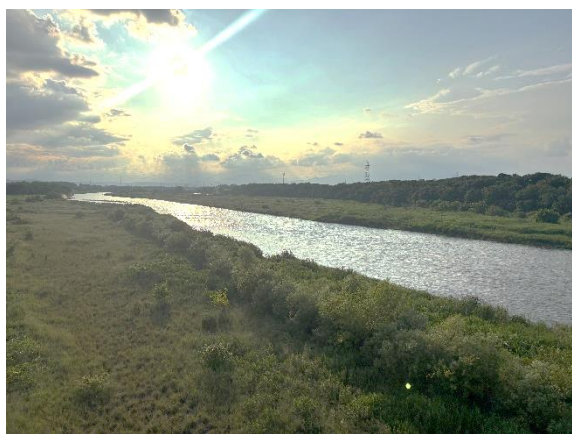
皆さんも見たことのある場所が見つかるかもしれません。



3



4



5



6

からすがわ はし
鳥川にかかる橋～佐野の舟橋に伝わる昔話～
さの ふなばし つた むかしばなし



令和 8 年撮影の佐野橋

からすがわ
むかしむかし、鳥川をはさんで

ひがし さの あさひちようじゃ
東の佐野には朝日長者

にし かたおか ゆうひちようじゃ
西の片岡には夕日長者

かねも ちようじゃ す
という、とてもお金持ちの長者さまが住んでおったそうなの。

2 人はいつも「どちらがえらいか」でけんかばかり。仲がと

な
ても悪かったそうじゃ。

あさ ひ ちょうじゃ

朝日長者には おなみ という美しい娘が、

うつく

むすめ

ゆ う ひ ちょうじゃ

夕日長者には 小次郎 というりりしい息子がおった。

こ じ ろ う

む す こ



ひ ゆ う ぐ

かわ

はし

つ き み

ある日の夕暮れ、おなみが川にかかる橋のたもとで、月見

そう

こ じ ろ う う ま の

とお

草をつんでいると、そこへ小次郎が馬に乗って通りかかった。

こ じ ろ う

み

小次郎はおなみを見たたん、「なんてきれいな人だろう」

こころ う ば

こ じ ろ う

り っ ぱ

すがた

あか

と心を奪われ、おなみも小次郎の立派な姿に、ほほを赤くし

たそうな。

まいにち

はし

それからというもの、ふたりは毎日のように、こっそり橋

あ

のたもとで会うようになった。

ところが、そのことが長者^{ちやうじゃ}たちに知られてしまい、おなみ
も小次郎^{こじろう}も屋敷^{やしき}に閉じ込められてしまったのじゃ。

それでもふたりの思い^{おも}は、ますます強^{つよ}くなるばかり……。

ある夜^{よる}、おなみは「どうしても小次郎^{こじろう}に会^あいたい！」と、
必死^{ひっし}の思い^{おも}で屋敷^{やしき}を抜けだした。そして烏川^{からすがわ}の舟橋^{ふなばし}を、
小次郎^{こじろう}のいる里^{さと}へ向^むかって走^{はし}った。ところが、橋^{はし}のまん中^{なか}あ
たりまで来^きたとき――



バシャーン！



おなみの姿^{すがた}は、大^{おお}きな音^{おと}とともに川^{かわ}の中^{なか}へ消^きえてしまった。
実^{じつ}は、ふたりが会^あえないようにと、長者^{ちやうじゃ}たちが橋^{はし}の板^{いた}をは
ずしていたのじゃ。

そのころ、小次郎^{こじろう}もおなみに会^あいたくて屋敷^{やしき}を抜け出^ぬし、
橋^{はし}の近^{ちか}くまで来^きていた。

おなみの^{ひ め い}悲鳴^きを聞いた^{こ じ ろ う}小次郎^{む ち ゆ う}は、夢中^{は し}で橋^かへ駆け寄り、板^{い た}
 がはず^みされているのを見てすべてを悟^{さ と}った。そして小次郎も、^{こ じ ろ う}
 おなみのあとを追^おうように、川^かの流れ^{な が}へ身^みを沈^{し ず}めたのじゃ。



ひとびと^{かな} 人々はふたりの悲^{こ い}しい恋^{う た}をあわれみ、歌
 に詠^よんだり語^{か た}り継^ついだり、橋^{は し}のそばに観^{か ん の ん}音
 さまを建^たてたりして、長^{なが}いあいだ 2 人を
 供^{く よ う}養したそうな。

(参考：「上州の史話と伝説」)



からすがわ せ い そ く さかな 鳥川に生息する魚

げんりゅういき
源流域…イワナ・ヤマメ・カジカ



アユ・ウグイ

かりゅう
下流…カマツカ・コイ・ギンブナ・ドジョウなど。

かくにん ぎょしゅ たんすいぎょ しゅ かいゆうぎょ しゅ けい しゅ
 確認されている魚種は淡水魚20種、回遊魚6種の計26種。

【p11-12 のこたえ】



1. 上佐野町の佐野橋から見た烏川

この電車は
上信電鉄よ



2. 国道18号線の君が代橋下を流れる烏川

がわ
川

階段みたいなものが
気になるなあ



3. 高崎環状線の環状大橋から見た烏川



北部小と豊岡小校区の
ちょうど境だよ



4. 阿久津町と倉賀野町を渡る鉄橋から見た烏川

高崎線の車窓から
撮影





5. 新町の岩倉橋から見た烏川

ゆったりとした流れで
まもなく利根川に合流！



6. 君が代橋から北側の烏川



遠くの山まで
よく見えるよ

【おまけ】

これは昭和38(1963)年に撮影された写真です。

p1 の最初の写真は令和8(2026)年にほぼ同じ場所から撮

影したよ。気がついたかな？



◀伊藤富太郎氏撮影写真
(高崎市立図書館所蔵)

【参考】

角川日本地名大辞典 10

日本全河川ルーツ大辞典

郷土のしおり西上州 第1集

グラフたかさき NO.24 特集2 烏川物語

上州の史話と伝説

吉井町誌

新町町誌

広報たかさき 1997.5.15号 裏表紙

図説 高崎の歴史

新編高崎市史 資料編9

目で見る高崎・安中の100年

高崎南八幡幼稚園小学校中学校史

北関東川紀行 3

国土交通省関東地方整備局 高崎河川国道事務所ホームページ

(https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0301_karasu/0301_karasu_04.html)

烏川流域森林組合ホームページ

(<https://karasu-mori.jp/pages/40/>)



からすがわ
烏川

2026 年 7 月 1 日 初版発行

編集・発行 高崎市立中央図書館
電話 027-322-7919
〒370-0829
群馬県高崎市高松町 5-28
